

3 年齢階級別の自殺者数の推移

年齢階級別の自殺者数の推移について男女別にみると、人口動態統計によれば（第1-6図）、男性については、昭和30年前後に15～34歳の階級が、60年前後に35～54歳の階級が、平成10年以降に45～64歳の階級がそれぞれ大きな山を形成している。女性については、昭和30年前後に15～34歳の階級が山を形成した後は、男性のような大きな変動はみられない。

昭和30年前後は男女とも15～24歳及び25～34歳の階級で自殺者数が増加しており、先述したとおり戦後の社会の価値観の変化や戦時体験の影響とする説もある。60年前後は男性のみが増加しており、中でも35～64歳の働き

盛りの中高年世代の自殺者が多く、プラザ合意以降に為替はドル安円高方向へ推移した中での不況が原因であるという説もある。

平成10年の急増では、特に男性の25～74歳の各階級で大きく自殺者が増加しているが、その後は25～34歳、35～44歳の階級は一旦増加した後、近年では減少しているのに対し、45～54歳の階級は15年を境に大きく減少し、55～64歳の階級も15年から減少傾向にある。また、65～74歳の階級は横ばいで推移していたが、28年は大きく減少した。なお、75歳以上の階級は10年の際にもあまり急増せず、なだらかに増加しているが、28年は減少した。

自殺統計をみると、全体的に、60歳以上（注）が最も多く、50歳代、40歳代が多くなっている。また、年齢階級の設定が人口動態統計とは違うものの、自殺者数の推移はおおむね同様の傾向を示しており、平成10年に急増した後、近年は減少傾向にあることが分かる（第1-7図）。

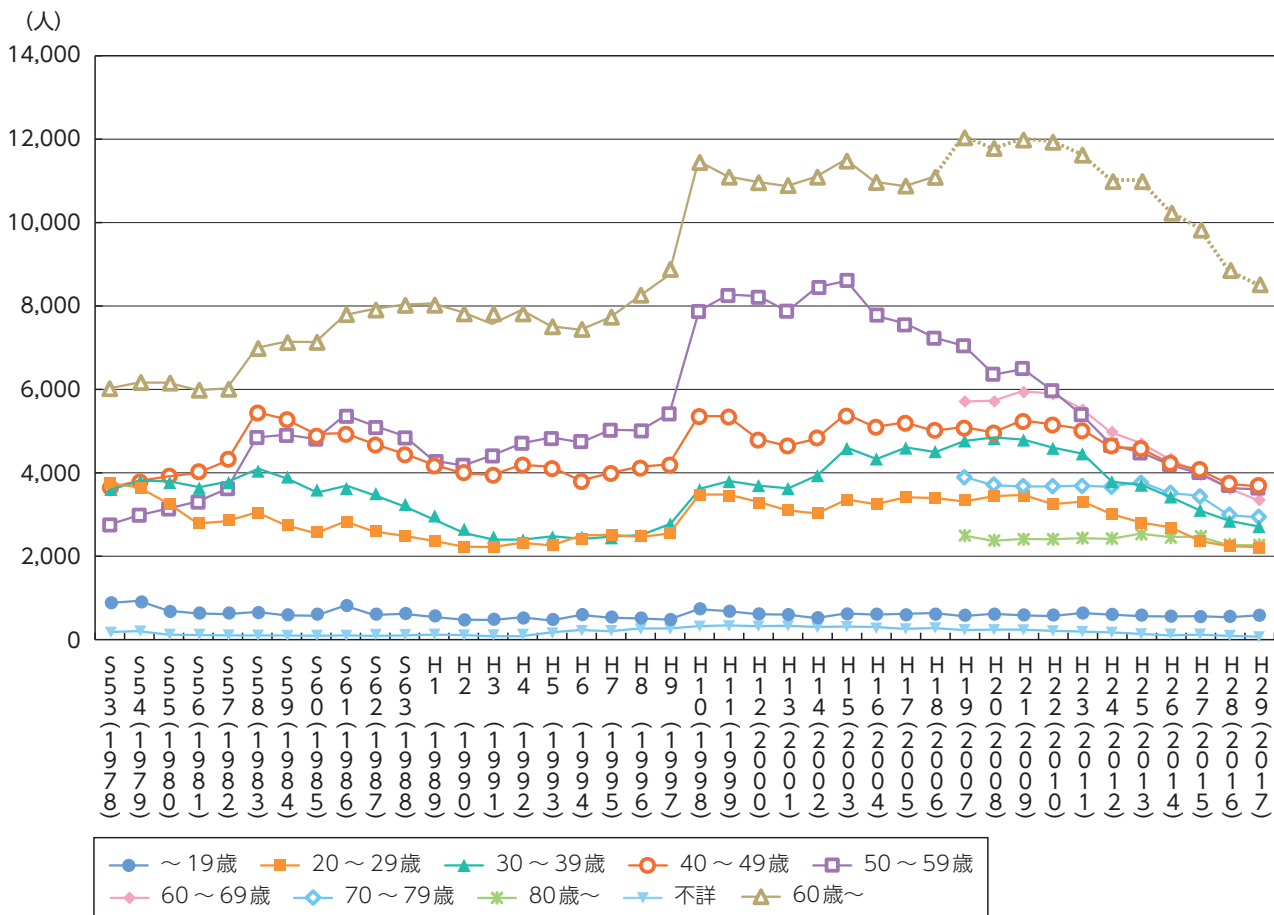
年齢階級別の自殺死亡率の推移をみると（第1-8図）、平成10年の自殺者数急増に伴い自殺死亡率も上昇したが、近年は全体的に低下傾向にある。

40歳代、50歳代、60歳以上は、ピーク時から大幅に低下している。一方、20歳未満では平成10年以降おおむね横ばいで、20歳代や30歳代は、ピーク時から低下がみられるものの、減少

率は40歳代以上と比べて小さくなっている。また、40歳代、50歳代、60歳以上は、急増以前の水準に低下している一方、20歳未満、20歳代、30歳代は急増以前の水準に戻っていない。

さらに、男女別にみると、男性は、40歳代、50歳代では15年まで上昇傾向にあったが、16年以降は低下傾向にある。一方、20歳代が一貫して上昇していたが、23年以降は低下を続けており、30歳代は15年に更に高まった後、そのまま高止まりしていたが、22年以降は低下している。女性は、20歳代、30歳代、40歳代では上昇傾向にあったが、24年以降は低下傾向にある。

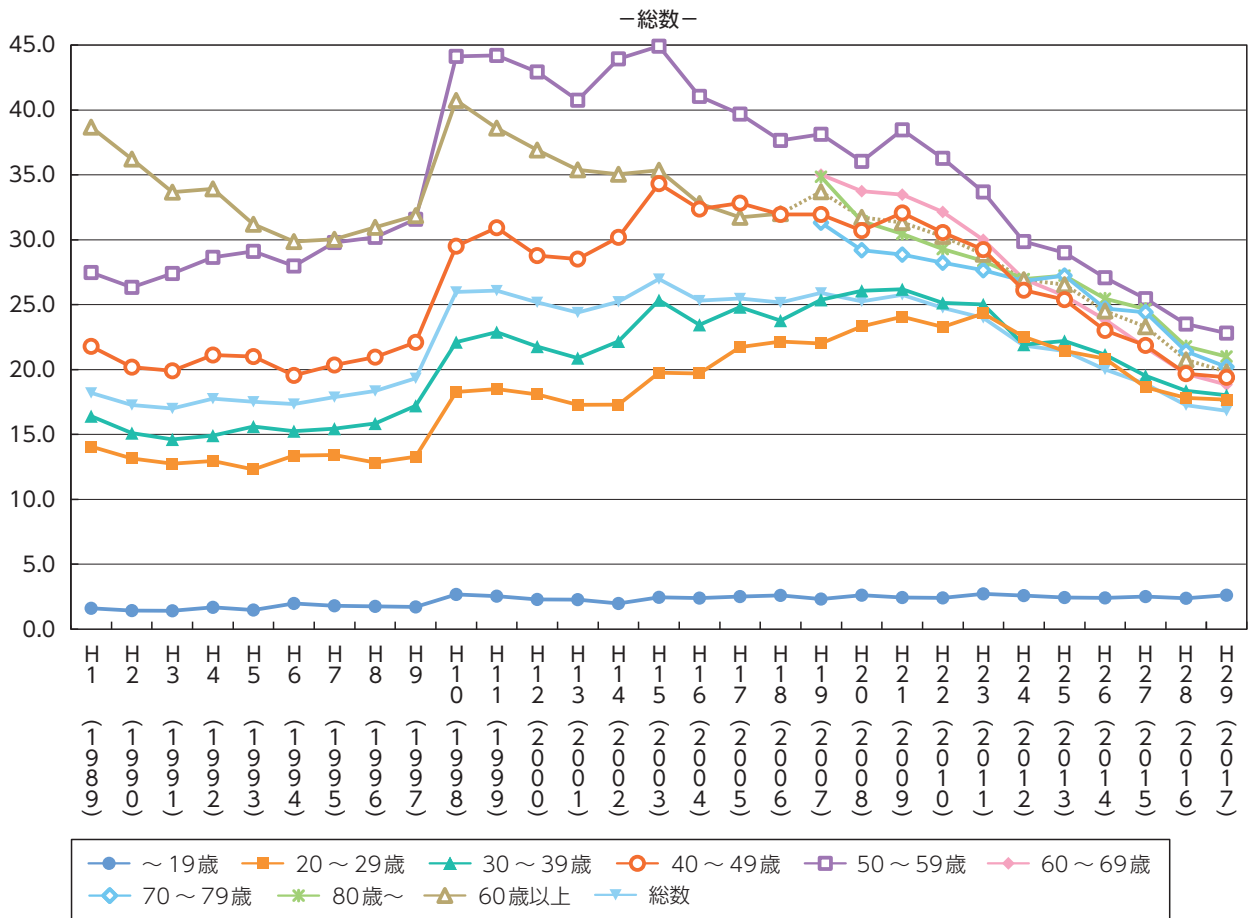
第1-7図 年齢階級別（10歳階級）の自殺者数の推移

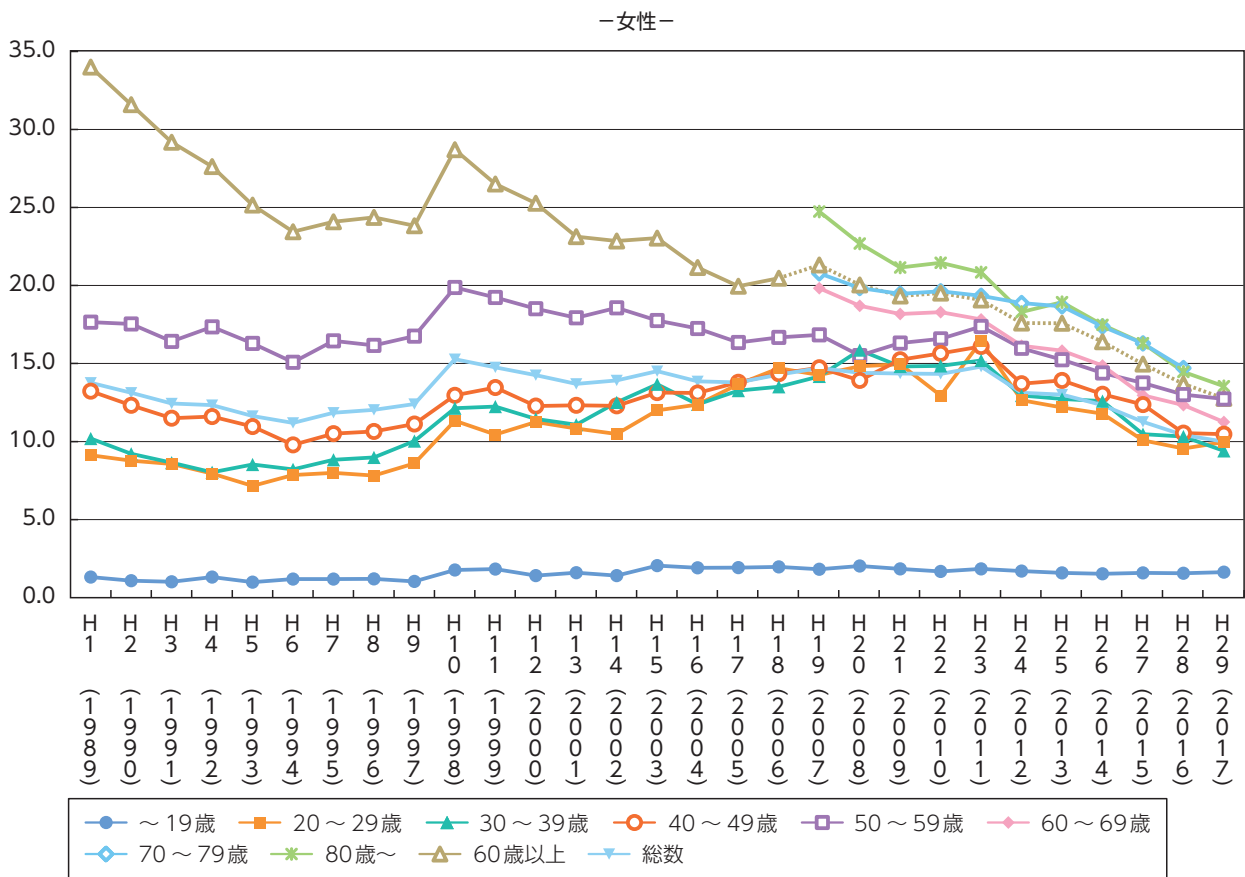
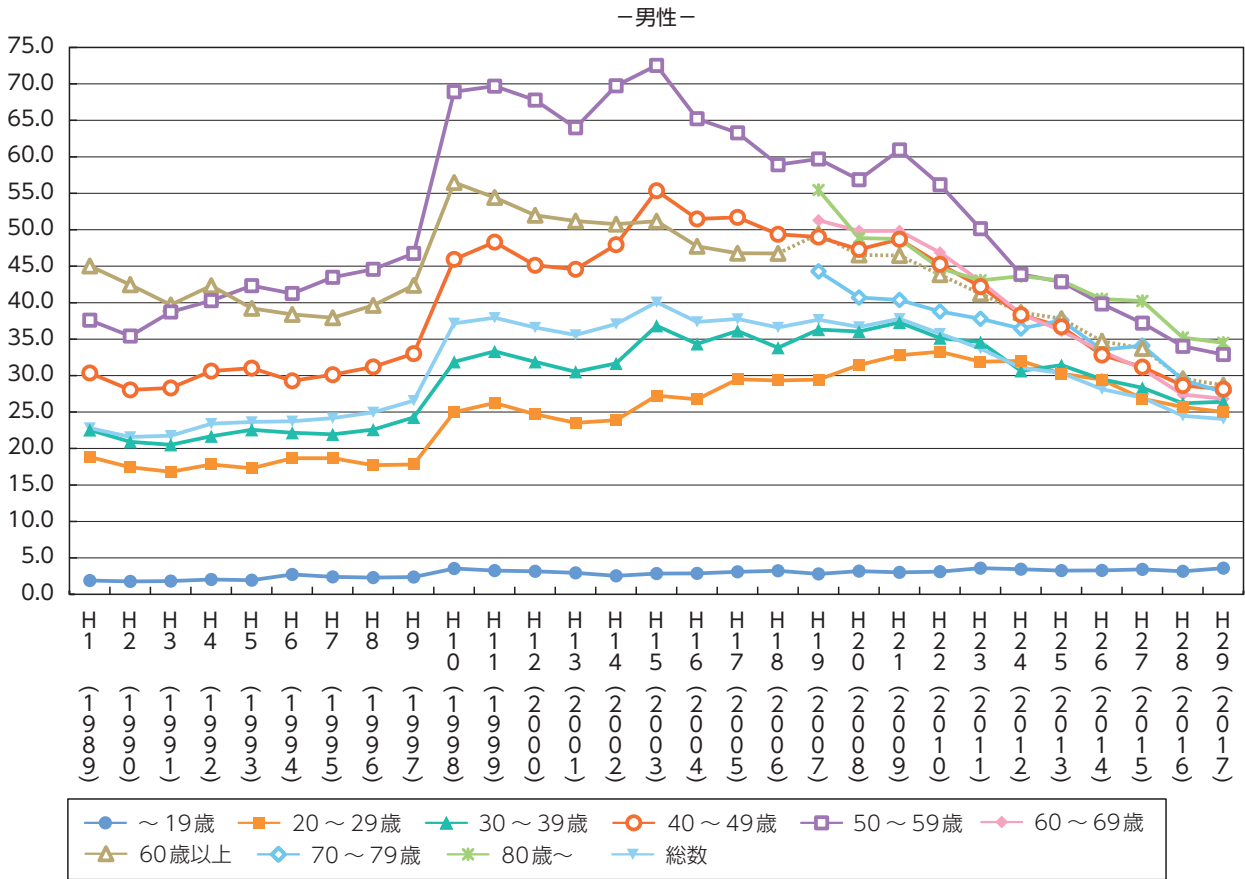


注) 平成18年までは「60歳以上」だが、19年の自殺統計原票改正以降は「60～69歳」「70～79歳」「80歳以上」に細分化された。
資料：警察庁「自殺統計」より厚生労働省自殺対策推進室作成

注：本文中においては、急増前の平成9年と近年とを比較するために、19年以降についても「60歳以上」の年齢階級で分析している。

第1-8図 年齢階級別の自殺死亡率の推移





注) 平成18年までは「60歳以上」だが、19年の自殺統計原票改正以降は「60~69歳」「70~79歳」「80歳以上」に細分化された。

資料：警察庁「自殺統計」、総務省「国勢調査」及び総務省「人口推計」より厚生労働省自殺対策推進室作成

我が国における若い世代の自殺は深刻な状況にある。年代別の死因順位をみると（第1-9表）、15～39歳の各年代の死因の第1位は自殺となっており、男女別にみると、男性で

は15～44歳という、学生や社会人として社会をけん引する世代において死因順位の第1位が自殺となっており、女性でも15～29歳の若い世代で死因の第1位が自殺となっている。

第1-9表 平成28年における死因順位別にみた年齢階級・性別死亡数・死亡率・構成割合

総数

年齢階級	第1位				第2位				第3位			
	死因	死亡数	死亡率	割合(%)	死因	死亡数	死亡率	割合(%)	死因	死亡数	死亡率	割合(%)
10～14歳	悪性新生物	95	1.7	21.6	自殺	71	1.3	16.1	不慮の事故	66	1.2	15.0
15～19歳	自殺	430	7.2	36.9	不慮の事故	306	5.1	26.2	悪性新生物	120	2.0	10.3
20～24歳	自殺	1,001	17.0	48.1	不慮の事故	373	6.3	17.9	悪性新生物	159	2.7	7.6
25～29歳	自殺	1,165	19.0	47.0	悪性新生物	315	5.1	12.7	不慮の事故	291	4.7	11.7
30～34歳	自殺	1,253	17.8	37.4	悪性新生物	641	9.1	19.1	不慮の事故	346	4.9	10.3
35～39歳	自殺	1,445	18.2	27.8	悪性新生物	1,326	16.7	25.5	心疾患	495	6.2	9.5
40～44歳	悪性新生物	2,675	28.0	28.9	自殺	1,739	18.2	18.8	心疾患	1,095	11.5	11.8
45～49歳	悪性新生物	4,753	52.1	34.1	自殺	1,888	20.7	13.6	心疾患	1,819	19.9	13.1
50～54歳	悪性新生物	7,696	98.9	39.5	心疾患	2,476	31.8	12.7	自殺	1,853	23.8	9.5
55～59歳	悪性新生物	12,605	168.9	44.5	心疾患	3,488	46.7	12.3	脳血管疾患	2,148	28.8	7.6
60～64歳	悪性新生物	23,343	288.4	48.4	心疾患	5,824	71.9	12.1	脳血管疾患	3,324	41.1	6.9

男

年齢階級	第1位				第2位				第3位			
	死因	死亡数	死亡率	割合(%)	死因	死亡数	死亡率	割合(%)	死因	死亡数	死亡率	割合(%)
10～14歳	不慮の事故	49	1.8	19.3	悪性新生物	48	1.7	18.9	自殺	43	1.5	16.9
15～19歳	自殺	301	9.8	36.9	不慮の事故	239	7.8	29.3	悪性新生物	78	2.6	9.6
20～24歳	自殺	745	24.6	50.6	不慮の事故	281	9.3	19.1	悪性新生物	95	3.1	6.5
25～29歳	自殺	877	28.0	51.2	不慮の事故	227	7.3	13.3	悪性新生物	155	5.0	9.0
30～34歳	自殺	936	26.2	42.0	不慮の事故	282	7.9	12.7	悪性新生物	261	7.3	11.7
35～39歳	自殺	1,032	25.6	31.4	悪性新生物	535	13.3	16.3	心疾患	378	9.4	11.5
40～44歳	自殺	1,305	26.9	22.4	悪性新生物	1,115	23.0	19.1	心疾患	830	17.1	14.2
45～49歳	悪性新生物	2,141	46.3	24.1	心疾患	1,453	31.4	16.3	自殺	1,400	30.3	15.8
50～54歳	悪性新生物	3,791	96.7	30.3	心疾患	2,005	51.2	16.0	自殺	1,353	34.5	10.8
55～59歳	悪性新生物	7,268	195.2	38.1	心疾患	2,858	76.7	15.0	脳血管疾患	1,474	39.6	7.7
60～64歳	悪性新生物	14,842	372.0	44.4	心疾患	4,640	116.3	13.9	脳血管疾患	2,360	59.1	7.1

女

年齢階級	第1位				第2位				第3位			
	死因	死亡数	死亡率	割合(%)	死因	死亡数	死亡率	割合(%)	死因	死亡数	死亡率	割合(%)
10～14歳	悪性新生物	47	1.8	25.3	自殺	28	1.0	15.1	先天奇形、変形及び染色体異常	18	0.7	9.7
15～19歳	自殺	129	4.5	36.9	不慮の事故	67	2.3	19.1	悪性新生物	42	1.5	12.0
20～24歳	自殺	256	8.9	41.8	不慮の事故	92	3.2	15.0	悪性新生物	64	2.2	10.5
25～29歳	自殺	288	9.6	37.6	悪性新生物	160	5.3	20.9	不慮の事故	64	2.1	8.4
30～34歳	悪性新生物	380	11.0	33.7	自殺	317	9.2	28.1	不慮の事故	64	1.9	5.7
35～39歳	悪性新生物	791	20.3	41.4	自殺	413	10.6	21.6	心疾患	117	3.0	6.1
40～44歳	悪性新生物	1,560	33.2	45.5	自殺	434	9.2	12.7	脳血管疾患	278	5.9	8.1
45～49歳	悪性新生物	2,612	58.0	51.9	自殺	488	10.8	9.7	脳血管疾患	375	8.3	7.4
50～54歳	悪性新生物	3,905	101.1	56.2	脳血管疾患	506	13.1	7.3	自殺	500	12.9	7.2
55～59歳	悪性新生物	5,337	142.8	57.6	脳血管疾患	674	18.0	7.3	心疾患	630	16.9	6.8
60～64歳	悪性新生物	8,501	207.1	57.6	心疾患	1,184	28.8	8.0	脳血管疾患	964	23.5	6.5

注) 構成割合は、それぞれの年齢階級別死亡数を100とした場合の割合である。

資料：厚生労働省「人口動態統計」より厚生労働省自殺対策推進室作成

こうした状況は国際的にみても深刻であり（第1-10図）、15～34歳の若い世代で死因の第1位が自殺となっているのは、先進国では

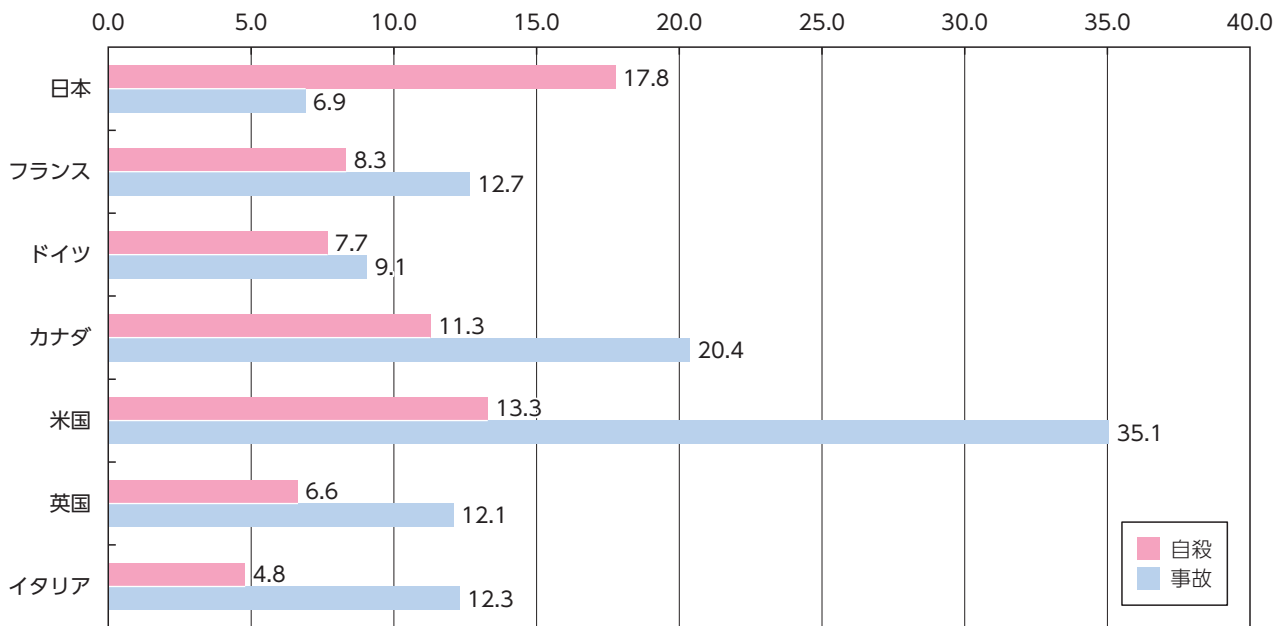
日本のみであり、その死亡率も他の国に比べて高いものとなっている。

第1-10図 先進国の年齢階級別死亡者数及び死亡率（15～34歳、死因の上位3位）

	日本 2014				フランス 2013				ドイツ 2014				カナダ 2012			
	死 因	死亡数	死亡率		死 因	死亡数	死亡率		死 因	死亡数	死亡率		死 因	死亡数	死亡率	
第1位	自 殺	4,557	17.8		事 故	1,955	12.7		事 故	1,710	9.1		事 故	1,924	20.4	
第2位	事 故	1,775	6.9		自 殺	1,286	8.3		自 殺	1,450	7.7		自 殺	1,066	11.3	
第3位	悪性新生物	1,339	5.2		R00-R99*	1,089	7.1		悪性新生物	981	5.2		悪性新生物	528	5.6	

	米国 2014				英国 2013				イタリア 2012				韓国（参考） 2013			
	死 因	死亡数	死亡率		死 因	死亡数	死亡率		死 因	死亡数	死亡率		死 因	死亡数	死亡率	
第1位	事 故	30,708	35.1		事 故	2,038	12.1		事 故	1,589	12.3		自 殺	2,580	18.3	
第2位	自 殺	11,648	13.3		自 殺	1,120	6.6		悪性新生物	889	6.9		事 故	1,225	8.7	
第3位	殺 人	8,303	9.5		悪性新生物	1,070	6.3		自 殺	620	4.8		悪性新生物	874	6.2	

※ICD-10（疾病及び関連保健問題の国際統計分類の第10回修正版）の第18章「症状、徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの」に該当するもの



注)「死亡率」とは、人口10万人当たりの死亡者をいう。

資料：世界保健機関資料（2016年12月）より厚生労働省自殺対策推進室作成